



TITLE:

石門心學に於ける經濟思想

AUTHOR(S):

竹中, 靖一

CITATION:

竹中, 靖一. 石門心學に於ける經濟思想. 經濟論叢 1941, 53(4): 436-450

ISSUE DATE:

1941-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/131600>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷三十五第

月十年六十和昭

論 叢

日本銀行を中核とする金融機關の組織體……

經濟學博士 小島昌太郎

資本主義を越ゆるもの……

經濟學博士 柴田敬

イギリス海運政策史上のアメリカ……

經濟學士 佐波宣平

個人主義經濟倫理の批判……

經濟學士 白杉庄一郎

ナチス經濟團體とカルテル……

經濟學士 靜田均

研 究

石門心學に於ける經濟思想……

經濟學士 竹中靖一

經濟社會の構造分析……

經濟學士 北野熊喜男

說 苑

ロバートソンの價格水準理論の批判……

經濟學士 青山秀夫

陳翰笙著「産業資本と支那農民」……

經濟學士 鈴木總一郎

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

研究

石門心學に於ける經濟思想

竹中靖一

一 序 言

石田梅巖を始祖とする石門心學は、經濟學者に依つて町人の哲學乃至は庶民學と論ぜられてゐるが、教育學者の間では、心學を以て人間學となし、士庶一貫の人の道を説く哲學となす主張がある。惟ふに、石門心學が、町人の體驗から生れ出たことも明かであると共に、町人の世界のみを考へてゐたのではないことも事實である。かくの如き心學思想の性格論は、姑く置くとしても、經濟思想史上より見れば、梅巖が町人存立の意義を高調すると共に、町人道の確立に努力したことは、最も偉とすべき業績である。而して、手島堵庵以下に依つて祖述せられた心學思想は、町人道自體の問題、更には一般に經濟生活の倫理化を中心として展開せられ、而も著しき社會教化の實を擧げ得たのである。我が國運隆替の岐點に際會し、皇國經濟道確立の要請今ほど切なるものなき秋に當り、石門心學に於ける經濟思想を一應檢討することも決して無意義ではないと思ふのである。然るに、石門心學は、常に卑俗の耳に入り易き表現を採つてはゐたが、その根底を貫いて哲學的傳統を失はなかつた點に通俗説話

- 1) 本庄榮治郎博士、日本社會史、226頁。野村兼太郎氏、概観日本經濟思想史、189頁以下。
- 2) 石川謙博士、心學教化の本質並に發達、32頁及び石門心學史の研究、5頁以下。田邊留藏氏、梅巖教の本質(法政大學編日本精神史論叢第二卷) 66頁以下。

と異なる特徴をもつが故に、私は先づ心學に於ける哲學的原理を概説したる後、その經濟思想を検討し度いと思ふのである。

二 心學に於ける哲學的原理

梅巖の學問は、全く體驗から生れ、生活の實踐に終る。文字に泥むは糟粕を味ふに同じく、文字知らずしても、親の孝は成り、君の忠も成る。只、心を盡して五倫の道を能くすれば、一字不學と雖も、之を實の學者を言ふことが出来る。¹⁾ 布施松翁、中澤道二以下が、一切の書物は、皆、心の所書に過ぎないと主張した立場は、心學の傳統であつた。

然るに、最も直接にして、最も確實なる體驗は心であるが故に、梅巖は、心を知るを學問の初となし、「萬事皆心よりなす、心は身の主なり」と考へて唯心的人間觀を樹立した。然し、謂ふところの心は、物に對する心ではなく、物の理が即ち心であると考へるのである。かゝる思想の根底には、儒教哲學に於ける性の觀念が横はつてゐるのであつて、梅巖の哲學には、心と性と云ふ微妙な問題があつた。曰く、

『心といへば、性情を兼ね、動靜體用あり。性といへば體にして靜なり。心は動いて用なり。心の體を以ていはゞ性に似たる所あり。心の體はうつるまでにて無心なり。性もまた無心なり。心は氣に屬し、性は理に屬す。理は萬物のうちにこもりあらはることなし。心はあらはれて物をうつす。又人よりいふ時は氣は先にして性は後なり。天地の理よりいふ時は、理あつて後氣を生ず。全體を以ていふ時は理一物なり。』

理の人體に宿つたものが性であるが、性は體にして、心は用である。人より見れば心に依つて性が認識せられ、天地の側より見れば理あつて後心も生ずる。こゝに、犬の理と人の心とが結び付き、人間觀に於ける唯心論

- 1) 石田梅巖、郝懿問答、卷之二(岩波文庫)63頁及卷之一(同前)22頁以下凡て岩波文庫の頁数を示す。
- 2) 松翁道話、五篇卷之下(岩波文庫)184—6頁。道二翁道話、初篇卷下(岩波文庫)48頁及び同續編、三編卷之下(同前)282頁以下、兩者共に岩波文庫の頁

は、儒教的宇宙觀に依つて裏付けられる。この宇宙觀よりして、梅巖は、「我は万物の一なり、万物は天より生ずる子なり」と觀じ、「人は一箇の小天地なり」と説くのである。³⁾日月星辰の運行、四季の循環等、易に云ふ陰陽五行の大字宙が、そのまゝ人間の世界に宿り、人は一箇の小天地と考へられる。この大字宙と小宇宙に通じて見らるゝ自然の法則が即ち理であり、それが人に宿つて性と言ふのである。かくの如き自然主義的世界觀は——尤もそれは自然科學的と云ふ意味での自然主義ではないが——漸く勃興し來れる市民社會に就ての梅巖の體驗に即したものであらう。市民社會に於ては、人間相互の關係は、商品交換の關係、物相互の關係となつて現はれ、個人は夫々の意志から獨立した市民社會の經濟機構の下に立ち、社會勢力に依つて支配される。かゝる社會勢力は、無意識的、無自覺的な社會自然であつて、梅巖の語を以て言へば天である。即ち、商品市場の相場も、彼に依れば、「天のなす所、商人の私にあらず」と觀ぜられる。⁴⁾堵庵が、「人と利を爭ふは己一人が力にて世界中の人を相手にして首引するに似たり。何ほど大力なりとも一人が力世界中の人に勝つべきいはれなし」と説いたのも社會自然に對する個體の無力を言つてゐるのである。⁵⁾

然し乍ら、天地の間、萬物一として同形同質の平等一枚ではあり得ない。形に差別あり、その機能を異にする。こゝに、梅巖は、獨自なる「形に由る心」の説を立てたのである。即ち曰く、

「元來形ある者は形を直に心とも知るべし。譬へば夜寝入りたるとき、寢振きし、をばへず形を相く。是形が直に心なる所なり。又子々水中に有つては人を螫さず。蚊と變じて忽に人を螫す。これ形に由るの心なり。……蛙は自然に蛇を恐る。……蛙の形に生るれば蛇を恐るゝは形が直に心なる所なり。」⁶⁾

蚊となれば人を螫し、蛙となれば蛇を恐れる。いづれも「形に由る心」である。之を社會的に見れば、武士には武士の心があり、町人には町人の心がある。人それ〴〵形による心に即して生き、その機能を發揮して、職分を

3) 都鄙問答、卷之一、20—21頁。

4) 石田先生事蹟(赤堀又次郎氏編、心學叢書第六編)312—313頁。

5) 都鄙問答、卷之三、87頁。

6) 同前、卷之二、70頁。

7) 手島堵庵、町人身體なほし(明倫舍編、手島堵庵全集)202頁。尙、拙稿、手島

勵むことに依つて、世の中の生活が完うされる。而も、梅巖は、「万物に天の賦し與ふる理は同じといへども、形に貴賤あり」⁹⁾と考へたが故に、階級の下上、身分の尊卑を承認し、「今日の萬民世渡りのことは定りある者なり」¹⁰⁾と見たが故に、家職の世襲を主張し、こゝに、封建體制を何ら批判することなく受容して、賤きが貴きに仕へ、下が上に奉ずることを自然の道であると考へると共に、身分の固定を疑はなかつたのである。然し、この場合にも、梅巖が強く主張したのは、與へられた職分を守り、夫々「形に由る心」を完うする點にあつた。

他方、また、この「形に由る心」の説は、梅巖自身が學問に對する場合にも發揮せられてゐる。即ち、「神儒佛ともに悟る心は一なり」と考へて、「一も舍ず一に泥」¹¹⁾ざる態度を堅持したが、「物に由つて法は替る」と見、心を清すには佛法をよしとするも、身に行ひ、家を齊へ、天下國家を治むる法には儒教を以てよしとしなければならぬと論じてゐる。¹²⁾然し、儒佛の二者にもまして、神道が重ぜらるべく、神道こそは皇國の教の根本と考へられ、「日本三部の書を明かにせば、何不足あるべきや」とさへ論ぜられてゐる。¹³⁾されば、彼は三教の孰れをも「心の磨草」としたのであるが、「儒道佛道老子莊子に至るまで、盡く此國の相とするやうに用ひねばならぬと確信したのである。¹⁴⁾かくて、梅巖の教説に於ける所謂三教一致は、三教各々その所を得しめて止揚したものであり、その基本となりしは神道であつた。故に、梅巖はよく我が國體を體認してゐたのであつて、天照皇太神宮を宗廟と崇め奉り、その御裔を一天の大君として仰ぎ奉る神國日本の臣民たる自覺が、彼の教説の基礎に深く沁み込んでゐるのである。即ち曰く、

『我朝の神明も、伊弉諾尊、伊弉册尊より受玉ひ、日月星辰より、萬物に至るまで總て主玉ひ、殘る所なきゆへに唯一にして神國とは云へり。こゝは工夫あるべき所なり。然れども唐土に替り我朝には、太神宮の御末を繼がせ玉ひ御位に立たせ玉ふ。依

塔庵の經濟思想(經濟史研究、第二十四卷第六號)50頁參照。

8) 都鄙問答、卷之三、95頁。 9) 同前、卷之二、50頁。 10) 同前、卷之三、97頁。
11) 同前、卷之三、100—103頁。 12) 同前、卷之二、52頁。
13) 新直慈音尼、道得問答、卷之三(前掲心學叢書、第五編)、215頁。

て天照皇太神宮を宗廟とあがめ奉り、一天の君の御祖先にてわたらせ玉へば、下萬民に至るまで參宮と言ひて、盡く參詣するなり。唐土には此例なし。此國には宗廟と尊ぶゆへに、神樂初穂を捧げ奉る。今日天下の萬民より君へ貢物を捧ぐるが如し。¹⁵⁾

次に、實踐を重んずる心學哲學の性格は、その立場を、實踐の主體としての個體の主觀的立場に惹き付けたのであるが、この點に關しては、師説を祖述して、更に實踐化し、主體化した堵庵心學に於て、最も著しく見らるるところである。堵庵は、本心の哲學を樹立し、本心に對して私心を區別し、私心を去つて「我なしの場」或は「私案なしの場」に生くべきを主張した。¹⁶⁾ この「我なし」と言ふ觀念は、長く心學思想の傳統となつたものであるが、「我なし」になると言ふことは、個體が小我を否定して世の中に和合することであり、個體が社會自然に従つて和合することこそ心學思想の主流であつた。然し、ともより、謂ふ所の個體は、全體から離れた個體ではない。「人は一箇の小天地」と見た個體であつた。我なしと云ふのは、個體の立場を一應否定し、小我の世界を止揚したものであつて、こゝから天地の理に連るのである。故に、堵庵に依つて一應主體化せられた心學哲學は、再び、道二に依つて客觀的な社會秩序を取上げて、道の哲學となつたのである。¹⁷⁾ 然し、その道は、自然に明かな道であつて、「道とは何ぞ、夏になれば暑うなる。秋は楓が紅葉する。夜が明けるとちうくがあゝ、鳥は鳥の道、雀は雀の道。柿の木に柿が出来る、栗の木に栗が出来る」と言ふ道である。¹⁸⁾ 即ち、梅巖の「形に由る心」の説に基くものであるが、人の道は人の心に内在する道であり、やはり又私心を去つた我なしの場を言ふのである。それは天地和合の道であり、天與の職分を忠實に勤め上げる道であり、而もそれは恰も自然界の草木鳥獸各々夫々天性に應じて和合してゐるのと全く同じである。かくて道二は「我なしの仁の處に居れば、道は自然に行はれる」と説き、その道は「たゞ素直に和合の道。此外に道はない。……聖人は……一切萬物を心として、其外に別に

14) 都鄙問答、卷之三、104—105頁。15) 同前、卷之二、47頁。

16) 前掲拙稿、手島堵庵の經濟思想、48頁以下參照。

17) 拙稿、心學道話に現はれた社會經濟思想(一)、(山口商學雜誌、第十一卷第六號) 65頁以下參照。

心はない。……物來りて順應する。心は虚靈不昧にして萬事に應じて跡なし。たゞ應ずるばかり、主人に向へば主人ばかり、親に向へば親ばかり、花に向へば花ばかり、……道といふは順應するばかり。去るによつて、人は一箇の小天地、天地の外に道はない」と説く。¹⁹⁾

心學思想の重點は、小我を止揚した我なしの境地に入ることであり、我なしになれば自ら天地の大道に従つて、人々は和合することが出来る。和合の道は、心學を貫く傳統的精神であつた。「すべて世の中は、互に助け合はねば世渡りは出来ぬもの」²⁰⁾世の中に最も大切なことは、和合の道である。道二は樂の和合に例を採つてこの事を説いてゐる。曰く、

『音樂の笛は笛、太鼓は太鼓、鼓は鼓と、調子のあふは和合の教へ。樂も和合せねば舞をまふ事は出来ぬ。……樂人も舞人も、互に譲合ふて和合すればこそ、間拍子が合うて、面白く樂もできる。あれが、樂人は樂人、舞人は舞人と、我まゝにやつて見ることがよい。分もなくどんちゃん／＼と、騒しい計りで、中々面白い處へはゆかぬ。……樂も……藝の至らぬものは、向ふへかまはず、我ばかりよく仕ようとかゝるから、調子があはぬ。笛は笛で向ふに構はず、我儘に吹き、太鼓は太鼓、鼓は鼓で、てん／＼向々、我まゝにしては、只びい／＼どん／＼ちやん／＼と大騒ぎばかりで、中々音樂處ではない。』²¹⁾

而も、和合の道は人相互の横の結びにあるのみではない。上下主従も亦和合の道に結ばねばならない。こゝに、道二は、封建體制の支配者が、下級者に養はれてゐる所以を自覺すべきを言つて、次の如く述べてゐる。

『おれは主人じやというて、たつた一人りきんで居たとて、家來といふものがあつて、且那樣／＼といへばこそ、主人じや、恐れながら、上々様方でも同じこと、皆下々のものに、惠まれて御座なさることを、御存じなさねばならぬ。百姓は百姓で、耕をして、御年貢を納めればこそ、下々へ御扶持を下さることが出来る。その外夫々の御役人があつて、召上り物御召物から、種々様々、何一ツ御不自由ないやうに、結構に遊ばされていらせられるは、皆御家來があればこそなれ。一切下から惠まれて入せられるのじや。世界中から天下様と崇め奉ればこそ、天下様じや。天下は一人の天下にあらず、天下の人の天下じや。……』

18) 道二翁道話、三篇卷上、79—80頁。

19) 同前、初篇卷上、29—30頁。同續編、二編卷上、259頁。

20)、21) 道二翁道話續編、二編卷上、252—3頁。

ケ國治めるにも、殿様ばかりでは治らぬ。……兎角に和合が本。殿様あつての民、民あつての殿様。それゆゑ民は民で、上を敬ふ道が正しくないと、國が治まらぬ。……又恐れながらも上々様も、立歸つて御覽遊ばすと、一切皆民に恵まれて御出あそばすゆゑ民の御世話を成らねばならぬ。夫が天の道じゃ。」²²⁾

以上述べし如く、心學哲學の根底には、天地の道を説く自然主義が横はつてゐると共に、體驗と實踐とを重んずる立場より、個體の反省が中心課題となり、個體の立場より、一應個體を否定して我なしの境地を説くが、そこに考へらるゝ世界は、大地であり、天下であり、天地、天下を貫く自然の道が問題となるのである。そして、個體がその本心を發明することは、この自然の道に従ふこととなり、それはまた、人々が互に和合することとなるのである。この意味に於いて、心學は、依然として個體の心を反省する心學である。但し、その場合に言ふ個體は、「人は一箇の小天地」と見た個體であつたのみならず、家の構成員としての個體であつた。梅巖は「堯舜の道は孝悌而已」と開悟したのであり、彼の『齊家論』は、儉約を本として家を齊ふべき道を詳述せしものであつて、その上巻の末尾には「家内和合して一人の如く治るならば、國恩に報じ奉る所以であると結んでゐる。²³⁾ 心學思想の倫理的焦點は、常に孝悌の道にあつたが、特に培養の如きは、忠を以て孝を説き、治國を借りて齊家のことを論じ、²⁵⁾ 後世の心學道話に於ても、家内の和合を説くことが最大の課題となつてゐる。こゝに於て、謂ふところの個體は、一應個體であり乍らも、而も全體を離れざるのみならず、全體を代表する個體を考へてゐたことは注目すべき點であると思ふ。和辻博士は、この立場を「家の利己主義」と批判せられるが、²⁶⁾ 必ずしも、利己主義の語が適切であるか否かは遽かに斷じ難きところである。

三 心學に於ける經濟思想

22) 同前、251—5頁。 23) 都鄙問答、卷之一、23頁。

24) 齊家論、上巻(前掲心學叢書、第一篇)、149頁。

25) 前掲拙稿、手島培庵の經濟思想、55—6頁、58頁。

26) 和辻哲郎博士、現代日本と町人根性(續日本精神史研究)、323—6頁。

體驗と實踐とを重んずる心學の傳統は、思想の表現に於て屢々身邊卑近の事例を擧げ、その故によく社會教化の實を擧げ得たのである。但し、それは單なる通俗を旨とせしものでなく、初に一言せし如く、その根底には常に哲學的原理を失はなかつた。寓話、例話は、具體的普遍者として擧げられてゐるが故に、一字不學の徒と雖も之をよく解し得ると共に、道心あり、悟境に入りしものは更に亦深くその意味を味ふことが出来るところに道話の特色があつた。然し乍ら、孰れにしても、身邊日常の生活事例を採るが故に、經濟生活にも觸るゝところ多く、哲學と經濟とがこの意味に於て結付き、寧ろ、經濟生活に依つて哲學を考ふる如き觀ある場合が屢々存するのである。

他方に於て、心學の現實主義的傾向は、物を作り、物を配し、物を消費する經濟生活が、すべての生活の基礎なることを認むるものであつて、松翁の如きは、天地の間に生を享くるもの、衣食住の三つより他に仕事はないとさへ極言する¹⁾。この點に就ては、梅巖の『都鄙問答』に於ける主張が、物を作り、物を配する町人、特に物の配給を司るべき商人の社會的役割を闡明して、町人存立の意義を高調するにあつたことは周知の如くである。即ち、「商人皆農工とならば、財寶を通はす者なくして、萬民の難儀とならん」と喝破したのである²⁾。然るに、かくの如く、商人存立の意義を高調し得る所以のものは、實に、「商人の賣買するは天下の相³⁾」となるからである。商業は「天下の財寶を通用して、萬民の心をやすむる」ものであり、商人は「福を得て萬民の心を安んずる」のであるから、「天下の百姓⁴⁾」といふべきである。こゝに於て、梅巖が町人を市井の臣となし、町人道を臣民道として把握せしことは、我等の最も傾聴に價するところである。即ち曰く、

『士農工商は天下の治る相なり。……四民を治め玉ふは君の職なり。君を相るは四民の職分なり。士は元來位ある臣なり。農人

1) 松翁道話、二篇之中、74頁。
2) 3) 都鄙問答、卷之二、71頁。
4) 同前、卷之一、36頁。

は草莽さうぼうの臣なり。商工は市井の臣なり。臣として君を相たすくるは臣の道なり。商人の賣買するは天下の相なり。⁵⁾』

商人は君を相くる市井の臣として存立の意義を有するが故に、財寶を流通せしめ、金銀のことを司る役人とも謂ふべきである。されば、外に對して、社會に於ける町人存立の意義を高調したる梅巖は、内、町人に對し、町人自體がよく町人道を自覺すべきを絶叫したのである。町人は市井の臣たる自覺と信念とに生きねばならぬ。商工は市井の臣、商人は天下の財寶を通用して萬民の心を安んずる役人であるとすれば、この金銀財寶を、我がものと思はず、「我はこのことを司る役人と思ふ志」を堅持しなければならぬ。⁶⁾

然らば、商人の利を得るは、道に非らざる行爲であるか。否、梅巖は、最も力強く、賣利の正當なる所以を主張した。曰く、

『賣利を得るは商人の道なり。元銀に賣るを道といふことを聞かず。賣利を欲と云ひて道にあらずといはゞ先づ孔子の子貢を何とて御弟子にはなされ候や。子貢は孔子の道を以て賣買の上に用ひられたり。子貢も賣買の利無くば富むること有るべからず。商人の買利は士の祿に同じ。買利なくば士の祿無くして事が如し。⁷⁾』

梅巖は、商人の賣利を、田地の作得や工人の作料と共に、之を武士の封祿と同一視して憚らない。「商人の賣利は天下御免しの祿」である。⁸⁾ 利を取らざるは商人でない。正當な利を取ることこそ商人の正直である。^(註二) 然し、商人が金銀財寶のことを司る役人なればこそ、その利潤を武士の封祿に比せられる根據も生ずるのである。故に、市井の臣たる商人は、須く「財を賣る中に祿あることを知る」べく、何よりも「勤むべき事を先とし得る事を後にするの忠をつくす」調べきである。⁹⁾ それが商人道の本義である。こゝに於て、梅巖は、商人の經濟倫理を高したのであり、後の心學思想は、この點を最も重んじたのである。商人は、天下の人々に商品を賣ることに依つ

5) 同前、71頁。
6) 同前、121頁。
7) 同前、67頁。
8) 同前、71頁。
9) 同前、71頁。

8) 同前、71頁。
齊家論、上卷(前掲心學叢書)135頁。

て生活するものであるから、「商人の田地は天下の人々にあり、天下の人々は我が俸祿の主にあらずや」と言ふべく、天下の人々に勤め盡すべきは當然のことである。

(註一) 但し、利は元銀に對して何程と定めることは出来ない。何故ならば、時の相場に變動あるが故である。そこに梅巖の體驗した商業資本主義社會の經濟機構が考へられて居り、時の相場は決して商人一己の私ではなく、天のなすところ、個人の意志を越えた社會自然の諸事情に基くものであると考へる。¹¹⁾

(註二) 然し、その倫理的内容に就ては、武士の道徳を理想としたのであり、商人と雖も心は士に劣るまじと自覺すべきを説いてゐる。これ、武士を町人同様と見なさんとした海保青枝と對比せられる所以である。然し、また、この限りに於て、「商人の道と言ふとも何ぞ士農工の道に替ふことあらんや」と考へられ、町人學としての心學が人間學となる所以が存するのである。¹²⁾

かく反省し來れば、富の主は天下の人々である。金銀財寶は決して私人の私物ではない。松翁は、「金銀は浮世の借り物、財寶は世界の道具で、世の中の備へ物」と言ふ。¹³⁾ 世界の道具であり、世の中の備へ物である財貨を生産し配給するものが、世の中の爲に勤め盡すべきは當然の任務である。その任務を果すが故に、利潤と云ふ祿を得て生活することが出来るのである。されば、亦、金銀財寶の消費に際しても、所謂生活正義の實現に努めねばならぬことは言ふ迄もない。鎌田一憲は、鑰持と金持の間答を以て、このことを巧に述べてゐる。即ち、

『鑰持金持に問うて曰く、「諺に鑰持やりを遣はず、金持かねを遣はずといふ。なるほど拙者はやりを遣はず、唯鑰を持つのみなり。此鑰を持たざれば、お鍋が粥餅も喰ふ事ならず。裸で道中ならざれば、明暮鑰をもつが所在。お身様はまた各別。金持かねを遣はずば、金もたざるに同じこと。何の益か是あらん。金持かねを遣はずとはいかなる譯ぞ。」金持の曰く、「……金銀を世界の貨と知る人は儉約を本として自身の榮耀物好には金を鑰はず。義あつて遣ふ金銀を、誰か是を金遣ひと言ふべきや。奴また金銀を己がものと頼む人は、金は持つても、苦き故、金持かねを遣はずと譲らるゝ。金持のかねを遣はぬには、吝嗇あり、儉約あり。公あり、私あり。蘇すもあり、殺すも有るべし。奴また遣ふべき爲の金は遣はず、却つて金に遣はるゝ人も有り。……」鑰持また問ふ、「かねが敵といふ世話あり。金持はみな敵もちか。」金持わらふていはく、「金なんぞ、かたきならん。金は本より寶

10) 石田先生語錄(山田俊卿本)、卷二十二、士と醫と商と何を主として行ひよからんやの條。
11) 柳邨問答、卷之二、70—71頁參照。
12) 同前、卷之二、70頁。野村氏、概觀日本經濟思想史、196頁、245頁。拙稿、石田梅巖の經濟思想(山口商學雜誌、第十一卷第三號) 91—2頁參照。

なり。^{もと}本よりかねは寶なれども、是もまた持人^{もたて}によるべし。……金^{かね}が敵^{かたみ}。欲^ほがかたきか。金^{かね}が寶か。命^{いのち}が寶歟。金持の金が世界の金か。金持のいはく、「金持の金が金持の金にあらざる事は、鎗^{やう}もちの鎗^{やう}が金持の鎗^{やう}にあらざるにて知りぬ。……」¹⁴⁾

金銀の用途には、公あり、私あり、義あつて使ふ金^{かね}にしてはじめて、金は生きているのである。使ふべき金に、却つて使はれてゐるのが、市民社會の有様である。人は須く、金銀財寶の意義とその公共性を自覺しなければならぬ。まことに、鎗^{やう}持の鎗^{やう}は鎗^{やう}持の鎗^{やう}に非らず、金持の金は金持の金にあらざる所以を知るべきである。それは恰も、この身、この身體が、自己のものであり乍らも、親のものであり、家のものであり、國家のものであり、大君の身體であると同じである。

こゝに於て、心學の傳統たる我なしの境地が高調せられるのである。經濟生活は、物に關するが故に、最も心が物に惹かれ易く、小我の私心私慾が働き易い場所である。「おれがおれが」と言ふ私心私慾が横行し易きが故にこそ、心學の教化が必要である。道話が最も力を入れたのは、此處であつた。鳩翁道話には、花兄の頃、貧雪隠を商賣にする家があり、強慾な隣家の主人がその繁昌を羨んで、更に立派な雪隠を作つて高價に貸さうとしたが、借手がない、そこで、辨當持ちで隣の雪隠に出かけて一日頑張つたと言ふ話を引いて、「ナント面白い咄でござりませうが、これがこれ、小人凡夫のはらはたの開帳ぢや」と述べてある。¹⁵⁾人はこけても倒れても、己れ一人がよければよいと云ふ私心私慾は、經濟生活に於て最も現はれ易いのである。私心を去つて、本心に立復り、我なしの境地に入つてのみ、所謂滅私奉公の經濟倫理が實現せられて、町人の臣道が實踐せられ得るのである。かゝる立場より、梅巖は具體的な經濟倫理の第一として正直の徳を擧げてゐる。商人と屏風とは直ぐには立たずなど言ふは世俗の誤である。彼の見解に依れば、むしろ屏風は少しでも曲^{まが}みあれば疊^{ふみ}まれず、地面平かならず

13) 松翁道話、四篇卷之下、151頁。

14) 雨やどり(前掲心學叢書、第二篇)、200—204頁—傍點筆者。

15) 鳩翁道話、參之上(岩波文庫) 65—9頁。

れば立たない。商人もその様に自然の正直がなくては、人と並び立ち、商業社會で健全なる發展を遂ぐることを得ない。「屏風と商人とは直ぐなれば立つ、曲めば立たぬ」と言ふことを取違へてはならない。¹⁶⁾而して、こゝに注目すべきは、この正直の徳を、梅巖は神國日本の國民道德として基礎付けてゐることである。正直は、士農工商の孰れもが、人として徹しなければならぬ道であるのみならず、正直こそ神の御徳の根幹である。正直は天照皇太神宮の御心であり、正直の心を失ふものは皇太神宮の御心に背くが故に、神國日本に住むべき土地もないであらうと梅巖は喝破するのである。¹⁷⁾

次に、消費生活に於ける經濟倫理は儉約である。當時の經濟學者にして儉約を説かぬものはないが、梅巖の儉約論に特異なるものは、儉約を以て正直の徳の表現なりとした點である。儉約とは、財貨消費に過不及なきを謂ふのであるが、小我の爲にする儉約は結局慾心の發露に過ぎず、吝嗇に墮する。儉約は社會の爲、天下の爲の儉約でなければならぬ。否、それでもなほ不十分である。我身の爲、天下の爲、道の爲などと、何かの爲にするは眞の儉約ではない。「儉約といふは、他の儀にあらず、生れながらの正直にかへし度き爲なり。』予が云ふ儉約は……私曲なく心を正しくするやうに教へたき志なり」と梅巖は述べてゐる。¹⁸⁾蓋し、人本來の姿は、私心なく、私慾なきものにして、私心を捨て、私慾の迷ひを去るならば、自ら儉約となるからである。それが即ち正直の本義である。¹⁹⁾

(註) 『齊家論』は家を治め齊ふるには、儉約が本なる所以を詳述せしものである。また、梅巖の日常生活が實に儉約に徹してゐたことは有名である。¹⁰⁾

然るに、人が正直の心に立復るならば自ら儉約となるのは、結局、物の恩を感じ、人の恩を思ふが故である。

16) 都鄙問答、卷之二、69—70頁。

17) 齊家論、下卷(前掲心學叢書)162頁及び164頁參照。

18) 同前、153、159及び164頁。石田先生語錄、卷七、神儒佛ともに性理は至極の所也の條。同前、卷十上、儉約の條。

感恩報謝が人を儉約に向はしむる推進力となるのである。自然の恵みと世の中の恩を思ふとき、生産にも、消費にも、小我の身勝手は出来るものではない。かくて、例へば、松翁は生産と關聯してこのことを説いて曰く、何事でも「ふやすが天地の御商賣……麥一粒天地へあづけてごらうにませ。凡そ二合ほどで御返濟なされる。……物を施して恩に着せぬは天、ものを請けてふやして戻すは地、其のふえたものは人、天地自然の姿は、まことに生成のみ、神道では陰陽冥合（みづくみまひあはふ）蔭生と言ふてある。²⁰⁾のみならず、世の中では夫々の人々が夫々の役割を勤めて、お互に助け合つてゐる。百姓が田畑を作るにも、畝の鋤のと、其の外に色々な農具を使はねばならぬが、それも皆他人の手傳ひによつて生じたもの、他人の生産にかゝるものである。おれが／＼の手ばかりでは、大根一本も作れるものではない。此の外、大工職人商人皆同じこと。かく見れば、雨露の恵み、天の御世話、他人の働き、世間の助けがあればこそ、我々の生産行爲も完うし得るのである。²¹⁾また、消費生活に關聯して、道二の言葉を開けば、五穀を始め、農作物が大地に培はれることはもとより、鍋釜から金銀錢に至るまで一切の鑛物は山から掘り出される。山海の魚介鳥獸草木一切の生物も毎口人の爲に命を捨ててゐる。鯛は鯛の妙あつて、命を捨てて人の用に立ち、松は千歳の齡を待たずに伐り倒され、家となり道具となつて人を助ける。「皆是天の御恵み、一つとして龜末に成らうか」と反省しなければならぬ。²²⁾のみならず、人生は全く社會の恩に依つて營まれる。夫々の職分に應じて世の中の人々が汗膏を絞つたものを、我々は消費するのである。梅巖の歌に曰く、

『炭薪米麥豆にいたる迄賤山がつの汗と思へば』

『行通ふ牛の車の音きけば涙と共に身をぞ養ふ。』²³⁾

かくて、人々は常に足ることを知つて、分に安んじ、今日の冥加を知らねばならぬ。知足安分こそ、安心立命

19) 石田先生事蹟(前掲心學叢書)297—9頁參照。尙、前掲拙稿、石田梅巖の經濟思想、90頁參照。

20) 松翁道話、二篇、卷之中、65頁。

21) 同前、五篇、卷之下、183—4頁。

の基であり、經濟生活の根幹である。金銀財寶そのものは決して貴いものではない。足るを知る心こそ、何にもまして貴い寶である。「足ることを知る心こそ寶船舶の數々積置かずとも」と道二は詠じてゐる。²⁴⁾

三 結 語

顧るに、石門心學は、經濟生活に於て哲學を考へ、哲學に基く倫理に依つて經濟生活を規正しようとしたものである。その體驗と實踐とを重んずる傾向は、よく經濟生活の重要性を認識し得たが、特に始祖梅巖にあつては、町人存立の社會的意義を高調し、商人の賣利を武士の封祿に比して憚らなかつた。然し、他方、彼は町人道の自覺を絶叫して、市井の臣たる町人の經濟倫理を説くのであつて、殊に堵庵以後の心學は、かゝる側面が著しく強くなつてゐる。かくて、財の公共性が説かれ、商業道德としての正直が高調せられ、消費道德としての儉約もこの立場から論ぜられた。それと共に、自然の恵と人の恩とが反省せられるのであるが、その根底に貫く思想は、「我なしの本心」に立復ることであつた。我なしの本心を發明すれば、聽て知足安分の悟境に入る。心學思想の核心は、かくて、知足安分にあると言ふことが出来る。而して、この知足安分に就て、石川謙博士は、梅巖の「我も一箇の小天地と知らば、何不足あるべきや」の語を引いて、知足とは我も亦圓滿具足の大實在たることの自覺なりとし、安分とは職分を勤め勵みて、全身全力を打込むことであると主張せられる。²²⁾ 我なしの境地に立てば、凡てが足れるを知るのであつて、個體の立場より和合する道はこゝにある。また、分に安んずることは、個體がその持場を自覺して、持場を守ることである。故に、心學思想一般を、端的に分の哲學と呼び、その經濟思想を分の經濟學と呼ぶことが出来る。

22) 道二翁道話、五編、卷之中、161—9頁。

23) 石田先生語錄、卷一、儉約は如何心得て勤むべく候やの條。

24) 道二翁道話、三篇下、106頁。

1) 石川博士、石門心學史の研究、88頁及び174—5頁。

然し、また、そこに心學思想の限界が存するのであつて、堵庵が「民の心學」と言へるは味はふべき言葉であり、所詮、石門心學は民の分を説いたものである。ここに、心學が御用學問に轉する危險があつた。分の經濟學は、具體的な日本國民經濟學の一契機たるを失はないが、知足安分の思想は、他方に於て、足るを得しめ、分を正しくし、各々その所を得しむる國家の立場、爲政者の立場と結付いてのみ、充全なる意味を持つことが出来る。それを離れて、知足安分のみを説くならば、御用學問と難ぜられても致し方がないと言はねばならぬ。

今や、超非常時局に際會して、心學復興の機運が動き、新體制の運営に之を採り入れようとする試が行はれてゐる。我なしが滅私奉公であり、分の思想が臣道實踐の基礎たるは疑を容れないところであり、且つ道語的表現がよく社會教化の實を擧げ得る點に着目せらるべきものもあるも、それと共に、現代の世界史的日本にあつて、昭和の心學を再興するとせば、三教止揚の精神よりして、大いに西洋文化の要素をも採入れる必要があり、また更に前述の如く御用學的性格を持つに至らざらんことを絶えず反省しなければならぬと思ふ。

2) 欲と無欲との辯(前掲堵庵全集) 592頁。